

飯山市埋蔵文化財調査報告 第65集

飯山城下情報センター敷地内遺跡

—IIYAMAJYOUKA JOUHOUSENTER SIKICHINAI SITE—

2002. 1

長野県飯山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、飯山市が計画した飯山市新世代地域ケーブルテレビ施設整備事業による（仮）飯山情報センター建設に伴う飯山城下情報センター敷地内遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 今回の調査地は、飯山市大字飯山1095番地1ほかで、発掘調査は飯山市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は平成13年8月1日より同年8月30日まで実施した。

- 4 調査体制は以下の通りである。

調査団長	高橋 柱
調査担当者	望月静雄（飯山市教育委員会事務局）
発掘作業参加者	万場義秋・高橋喜久治・高橋武・岩井伸夫・阿部智子・宮本鈴子・水野翔 小林金造
整理作業参加者	小林正子・藤沢和枝

教育委員会事務局	清水 長雄（教育長）
	市川 和夫（教育次長）
	米持 五郎（生涯学習課長）
	丸山 一男（生涯学習課長補佐兼社会教育係長）
	望月 静雄（生涯学習課社会教育係主査）
	市村 真理（生涯学習課社会教育係主事）
	藤沢 和枝（埋蔵文化財センター職員）

飯山市総務部情報政策室関係者

足立 正則	（室長）
服部 敏夫	（情報政策係長）
西田 浩二	（主事）

- 5 本書の執筆・編集は望月静雄が行った。
- 6 発掘調査から報告書作成において、下記の方々からご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
（坂東建設・矢口通子（敬称略）
- 7 出土遺物・図面は飯山市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

目次

I 調査の経過	1
1 調査にいたるまでの経過	1
2 調査経過	3
II 遺跡の位置と歴史的環境	4
1 遺跡の位置	4
2 歴史的環境	4
III 発見された遺構と遺物	7
1 遺構	7
2 遺物	7
IV 周辺における近世末期の武家屋敷について	9

図 版

図1 遺跡の位置 (1:2000)	2
図2 江戸時代末期城下町絵図	5
図3 調査地区平面図 (1:500)	6
図4 出土陶磁 (1:3)	7
図5 遺構平面図 (1:50)	8
図6 本多時代家中屋敷図	10
図7 明治初期旧藩地籍図	11
図8 高野正兵衛屋敷間取図	12
図9 武家屋敷地推定図 (1:2000)	13

写真図版

- 写真1 発掘調査地試掘近景 (平成13年4月)
写真2 発掘地区全景 (平成13年8月)
写真3 発掘調査風景
写真4 発掘完了写真

I 調査の経過

1 調査に至るまでの経過

長野県飯山市の中心を成す飯山町は、近世飯山藩飯山城を中心として発展してきた典型的な城下町である。飯山城は梯郭式の平山城で、昭和40年7月長野県史跡に指定されている。現在は城山公園として市民の憩いの場となっている。

城下は城の周囲に侍屋敷を配置した（現在の北町・福寿町・田町の一部）。町屋は街道沿いに当初上町・下町（本町）・肴町が形成され、続いて伊勢町（神明町）、愛宕町などができた。これらの町は、現在も飯山市の中心商店街となっており、近世からそのまま発展してきたものである。したがって、埋蔵文化財の観点からすれば現在の中心商店街は近世城下町の遺跡であり、保護対象となるべきものである。

飯山市では遺跡分布図を作成済みであるが、近世城下に関しては範囲を示していなく、飯山城跡のみを遺跡として範囲を明示している。これは、近世遺跡をどこまで保護対象として行政責任で実施すべきかという大きな問題が存在していることにある。飯山市では市街地の近世遺跡に関して、飯山城に近接する地域及び公的機関が実施する比較規模の大きな工事等の事業について事前協議を行う事としてきている。今回の事業については、まさにこのことに該当しており市役所内で協議を行ってきた。以下にその経緯を略述する。

平成12年、市企画財政課より仮称飯山情報センターの建設計画の内容について説明を受けた。飯山市役所の南側の部分で、古絵図では侍屋敷の一角であった。ただし、住宅などの建物が立ち並び近世武家屋敷の遺構確認は難しいとの判断をし、工事に先立つ立会い調査を実施する事とした。

平成13年4月16日、情報政策室より飯山市長名で「土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知書」が市教委に提出された。市教委では、立会い調査の結果により判断する事とした。

4月21日、新設された情報政策室の依頼により重機による立会い調査を実施した。その結果、地表下20～30cmより礎石の礎石と思われる小石のまとまりを3箇所において確認した。そのため、一部に近世侍屋敷跡が残されている可能性もあり、加えて市の事業でもある事から万全を期すために発掘調査を実施することとした。ただし、工事自体のスケジュールに埋蔵文化財発掘調査の余裕を設けてなかったために、本体建設部分については立会い調査を詳細に実施する事とし、外構工事部分について発掘調査を実施することとした。

なお、立会い調査地区においては3箇所の礎石のまとまり以外は現代建物基礎のために破壊を受けていた。

5月1日、立会い調査結果により、市長より提出されていた「土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知書」に「古絵図により侍屋敷の存在していた場所として明確であり、公共事業でもあるので発掘調査を実施して記録保存を図りたい」との市教委意見書を添付して県教育長宛提出した。

5月10日付けで県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、事前に発掘調査を実施して記録保存を図るように指示があった。

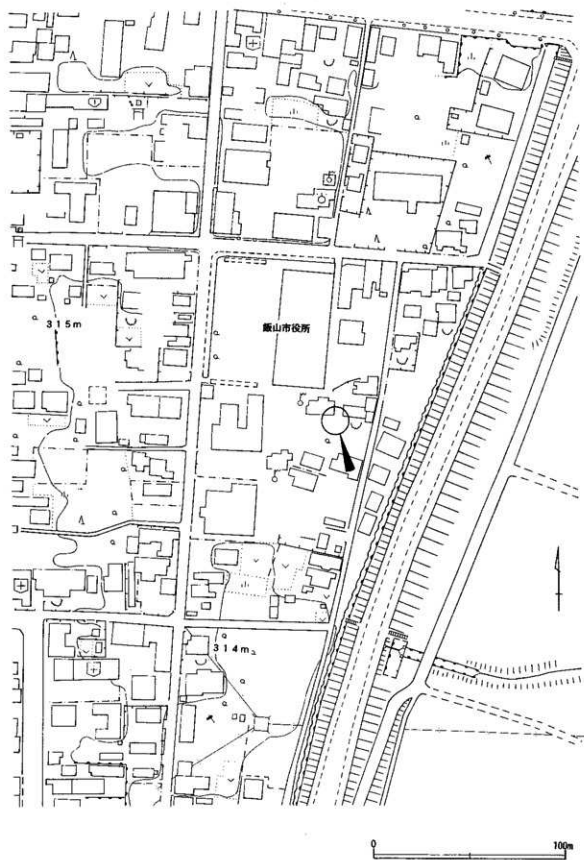


図1 遺跡の位置 (1:2000)

その後、担当課である市情報制作室及び建設請負業者の味坂東建設担当者と協議を続けた。建設工事も期限が決められており、発掘調査の日程を入れることが困難な状況のため、並行して実施する事とした。建物本体の部分については、立会い調査済みであったため建設工事を開始することとし、削土を伴う駐車場等について、建設工事の危険性がなくなる8月を予定として調査を実施することとした。

2 調査経過

平成13年8月2日 表土に建設のための砕石が厚く盛られていたため、重機により除去。任意に調査区を設定する。

8月3日 調査中の飯山城跡より器材搬入。調査区を設定の後作業員3名により調査。赤褐色の千曲川堆積土で、緻密な砂質粘土である。コンクリート等建物基礎があり、かなり破壊を受けている事が伺えた。

8月4日 調査続行。建物基礎等の残骸除去に難渋する。

8月5日 調査区北側で織り石のまとまりを1箇所検出。

8月6日 織り石の続きを追跡。約1.5m東より新たに1箇所検出、さらに1.8m東からもう1箇所確認。直線とはならずややずれが認められる。

8月8日 調査区南側を、土層調査のため掘り下げる。赤褐色の千曲川堆積土が厚く堆積している。

8月8日 調査区全体を清掃。写真撮影を実施。

8月9日 調査区全体測量。

8月20日 境界等確認後、調査区位置図等作成。器材撤収。

～8月30日 残務整理。

8月30日 埋蔵文化財発見届、保管証、終了届提出。

II 遺跡の位置と歴史的環境

1 遺跡の位置

飯山城下情報センター敷地内遺跡は、飯山市大字飯山1095番地に所在する。

近世城下町として栄えた飯山市街地内にあり現在区名は福寿町に含まれるが、かつては鷹匠町と呼ばれた一角に所在する。飯山城南大手門より南に400m、東側には千曲川、西200mには町屋の中心地があり、飯山城南の武家屋敷として中心地帯である。

現在は、飯山市役所や北信森林管理署、飯山簡易裁判所、長野地方務局飯山支局などが建ち並び、官庁街となっている。

付近の標高は314mで、現千曲川水面が312mであるので、その比高差は僅か2mである。現在は標高約320mの堤防が造成され、その上を国道117号線バイパスが走っている。

2 歴史的環境

本遺跡を含めた飯山市街地は、千曲川沖積地の上に立地しており、本格的な開発は中世末からはじまった城下の整備が最初であろう。ただし、それ以前にも周辺の微高地には古くから人々が生活していた痕跡が各所で確認されている。

飯山城北側にある長野県立飯山北高等学校敷地内は、北町遺跡と呼ばれている遺跡地でもあり、弥生時代の竪穴住居址をはじめ古墳時代や平安時代の遺物も発見されている。また、JR北飯山駅や愛宕町、神明ヶ丘のシャンツェ付近にかけて弥生遺跡が点在する。現市街地である低湿地帯を取り巻くように弥生時代の居住空間があったことを示唆している。

また、飯山城跡は永禄4年に上杉謙信が本格的に築城したものとされているが、この自然残丘上にも旧石器時代の石器や縄文時代・弥生時代の遺物が発見されている。

さて、飯山市街地が形成されたのは、天正10(1582)年、飯山城及び飯山地方が再び上杉氏の手に戻ると、景勝は岩井備中守信能を飯山城留守居役とし、飯山城の改修と城下街づくりを命じたのが始まりとされている。最初に上町・下町(本町)・肴町の三町を整え、武家屋敷地等も整備した。以降次第に広がり、越後に続く道筋には、神明町・愛宕町などの町屋もつくられた。また、近世飯山藩の歴代城主は寺院を招致・建立し、城の西丘には多くの寺院が建ち並んだ。

このように、武家屋敷・町屋・寺院が整然と区画されて形成された飯山城下も、現在では寺院を除きほとんど残されていない。これは、弘化4年の普光寺地震、慶応4年の飯山戦争、明治19年の大火と連続的に大きな災害に見舞われ焼失したことによることが大きい。

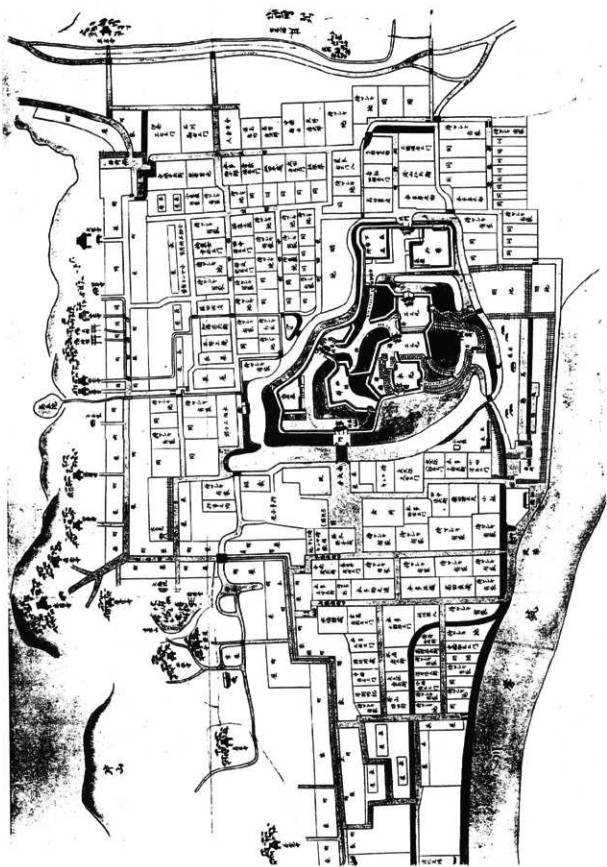


图2 江戸時代末期城下町絵図 印刷物より写 (本多芳治氏蔵)

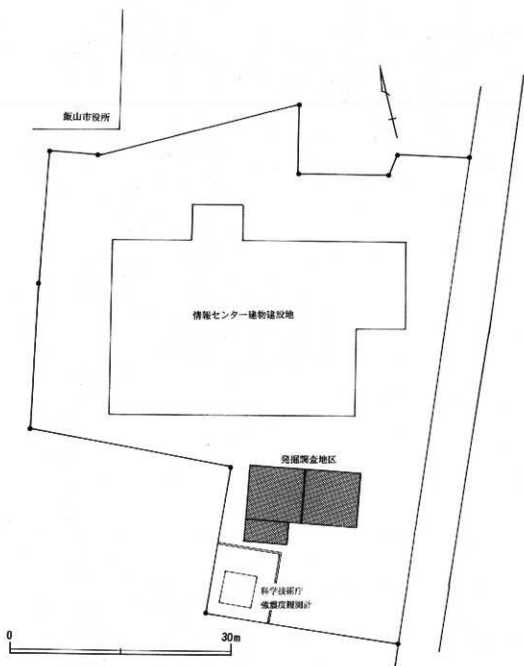


図3 調査地平面図 (1:500)

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1 遺構

発掘面積は58㎡で、遺構は近世侍屋敷建物の基礎と思われる繰石5基のみである（図5）。大部分に新しいコンクリートの基礎が入っており、そのため多くの部分が破壊されている。

繰石は、調査区北側で検出され、小石10個前後で構成されている。繰石1と2・3・4の間隔は、それぞれ1.5m・1.8m・1.8mで、繰石3がややずれており一直線とはならない。繰石4・5は、破壊されていたが、一部が残されていた。これらは建物基礎の一部と考えて良いと思われるが、限られているため詳細は不明である。

他は、現代建物のコンクリート基礎等で破壊されており、詳細を明らかにすることはできなかった。

2 遺物

発見された遺物は3点のみであり、1点は近・現代であることが明白のため除外し、2点を図4に示した。

1は肥前系陶磁染付蓋物である。表側には蝶及び鳥と思われる文様がつけられ、内面には幾何学的文様の縁取り及び中央には「寿」が記されている。2も肥前系陶磁染付碗であるが、文様については一部のみのためはっきりしない。全周に施紋されてはなく、おそらく草花文の一種と思われる。

これらの年代についてははっきりしないが、1の蝶や寿は近世から存在するものであるが、鳥様の文様はあまり知られてはいないのであるいは明治期まで降るかもしれない。2は一部のみではっきりしないが、近世後期のものと考えられる。

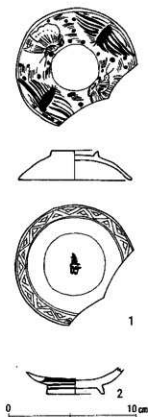


図4 出土陶磁（1：3）

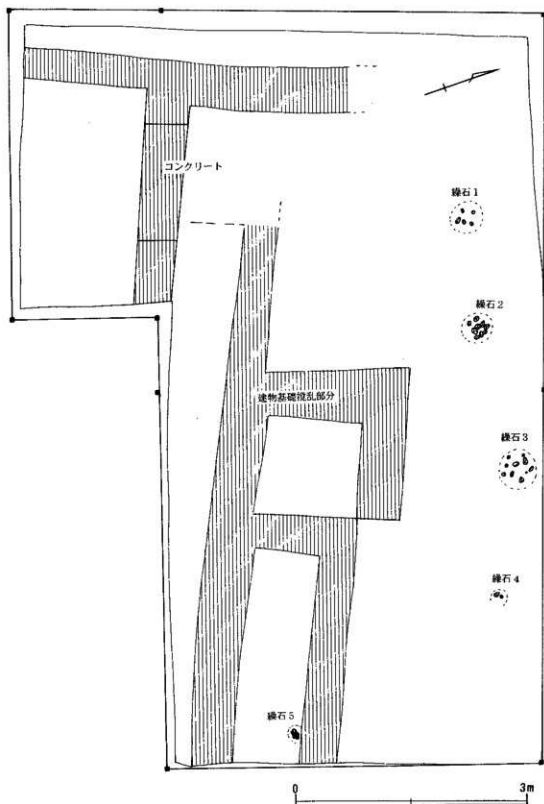


図5 遺構平面図 (1:50)

Ⅳ 周辺における近世末期の武家屋敷について

近世後期の本多氏時代の城下町絵図については比較的多く残されており、当該地の侍屋敷についても明確に記されている。今まで現況図と古絵図面と実際に対照する事はあまりなかったが、飯山市では最初の侍屋敷の発掘調査を実施したことから、こうした作業も当然必要であると考え、ここでは、印刷物として刊行された「江戸末期 城下町絵図(写)(本多芳治氏蔵)(図2)及び飯山小学校所蔵の絵図(図6)を参照して当時の土地所有者について考えてみたい。

飯山市役所敷地は城代本多十郎衛門屋敷地跡

飯山市役所から南側にかけは、当時鷹匠町、福寿町と呼ばれていた一帯で、比較的飯山藩の重職にあった武士の居宅となっている。現市役所のある場所は両絵図とも「本多十郎右衛門」と記載されている。十郎右衛門は飯山城代で、明治2年の階級令では他の2名とともに本多藩主の一族として1等席となっている(飯山町誌)。この本多氏の屋敷面積は大久保家所蔵の文久の絵図によれば1850坪と広大な面積であり、現在の市役所から北信森林管理署の敷地を含む部分と考えられる。

外様代官高野正兵衛屋敷について

さて、今回の調査地区については、発掘当初絵図を参考としておそらく高野正兵衛の屋敷跡付近ではないかと推定していた。高野氏は飯山藩の外様代官としてしばしば文献にも登場する人物である。高野正兵衛が高祖父にあたるという矢口迪子氏のご教示によれば、高野正兵衛は藩の軍学(長沼流)と長巻柄太刀(神武流)の師範でもあり、私的に常平倉を運営して窮民の救済にあったとされる。また、高野氏の出自は、福高正則に従って川中島に入り、正則没後は帰農していたところ本多氏の飯山入城に際して召抱えられたと系図に示されているという。高野正兵衛の父助一郎は、やはり外様代官として文献に登場しているが、市内柳原地区沼ノ池弁天島には、用水改修の感謝の記しとして地元庄屋達が建てた高野氏の記念碑がある。

また、矢口氏所蔵の古文書の中に高野氏屋敷建物の平面図が残されている(図8)。それによれば総坪数64坪八分とあり、畳の敷いてある部屋だけでも一部不明であるが56畳以上もあるかなり大きな建物であったことがわかる。明治2年の階級令によれば1等から9等まで分け、7等以上を士族としており、高野氏は5等席であり、中流の上に入る武家であり、当時の藩上の建物規模を知るうえで貴重な資料である。

情報センター敷地は藩士「安井小次郎」の敷地跡

その後、明治初期の旧藩地籍地図(図7)や大久保家所蔵の文久年間の屋敷地図など存在していることを知ることができた。旧藩地籍図には地番が記載されており、ほぼ現在と同様であった。また、屋敷内道路がそのまま残されており、現地番が複雑に残されていることから、容易に対比することが可能となった。今回の調査区の地番は1095であり、旧藩地籍図(図7)みると屋敷内道路に接した南側である。道路の北側は一区画のみで、絵図(図2)では「杉原源八」とある。そして1095番地はその南隣で、同じく図2では「安井小次郎」となっている。高野氏はさらにその南隣の1088番地である。

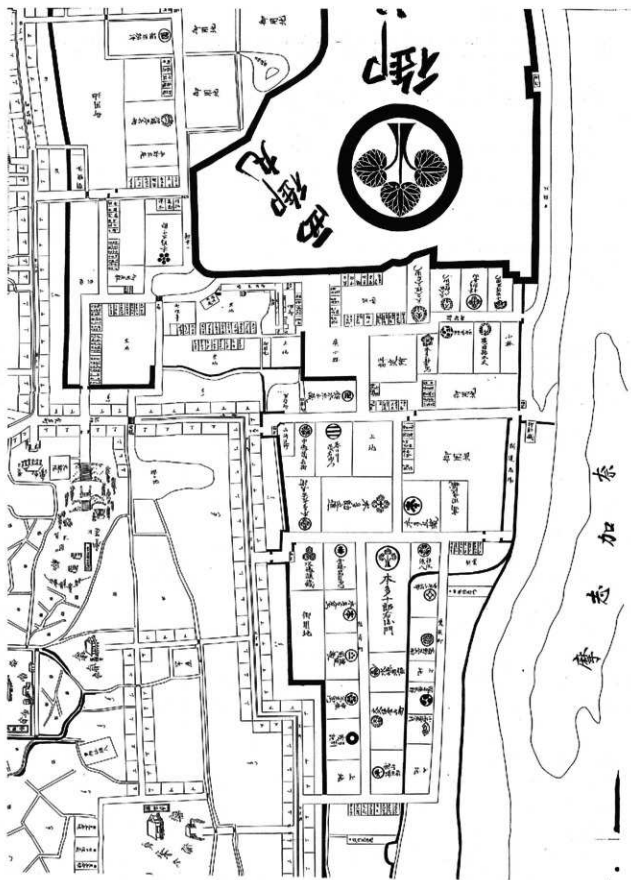


図6 本多氏時代家中屋敷図 部分写・縮小（飯山小学校蔵）

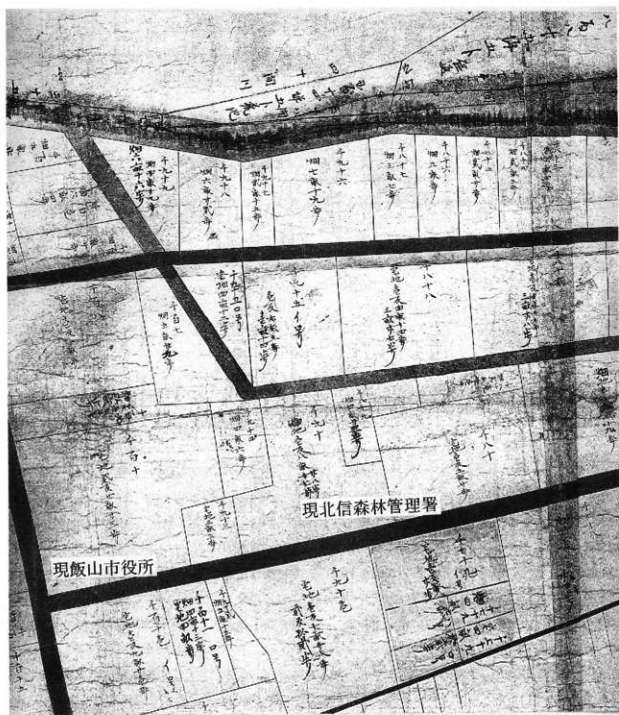


図7 明治初期旧藩地籍図 部分写・1/2縮小 (飯山市教委所蔵)

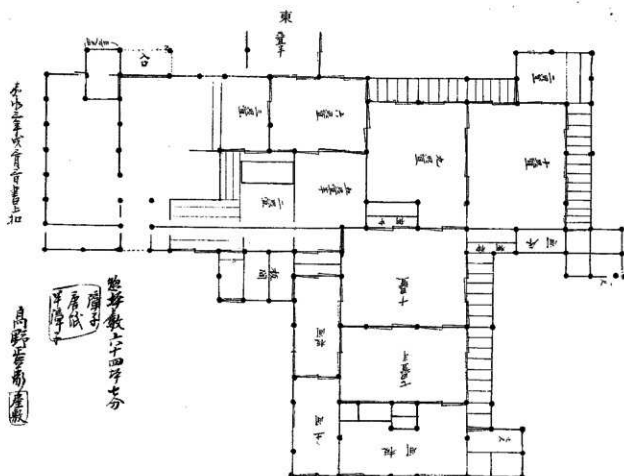


図8 高野正兵衛氏宅間取り図写・縮小（矢口迪子氏所蔵）

以上のことから、今回調査を行った箇所は、江戸末期には安井氏屋敷の場所であったと考えられる。安井氏については、田川幸生氏が調査されている「飯山藩士・寺子屋師匠の安井幽松について」（高井137号）。それによれば、本多氏の家臣であって享保2（1717）年、本多助芳の飯山入封に従って飯山に屋敷を構え、西念寺の檀中となった。5代は郡奉行・寺社奉行を勤めているという。安井家6代及び7代に「安井小次郎」があり、6代頃の嘉永元（1848）年の安井家の石高は70石で、藩上の序列では70番目の石高である。7代安井小次郎は飯山藩祐筆（公文書を書く役人）であり、寺子屋の師匠でもあったという。そして、8代の安井半左エ門は飯山藩権少参事として信州列藩会議に飯山藩を代表して松代に出張しており、幕末から明治にかけては要職にあったことがわかる。また、前記階級令によれば4等席に「安井半左エ門」があるので、6代頃の70番目から20～30番目くらいの位置まで出世したといえようか。

以上、絵図との比較で現飯山市役所から南側一帯の旧武家屋敷について調査した結果、概ね図9のように配置されていたのではないかと推定される。今後さらに詳細に探求していきたいと考えている。

いずれにしても、今回の調査区は「安井氏」の屋敷跡だったことが判明した。遺構等はほとんど残されていなかったが、今回の文書調査等で侍屋敷の位置を明確にし得たことの意義は大きい。飯山城下は「歴史的環境」の項でも触れたが、いくつかの火災等の災害により現在残されているものほとんどないが、残されている資料から地道に積み上げていくことが今後とも必要であろう。



写真1 発掘調査地試掘近景(平成13年4月)



写真2 発掘地区全景(平成13年8月)



写真3 発掘調査風景



写真4 発掘完了写真

報告書抄録

ふりがな	いいやまじょうかじょうほうせんたーしぎちない							
書名	飯山城下情報センター敷地内遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第65集							
編著者名	望月静雄							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2292 長野県飯山市飯山1110-1 TEL 0269(62)3111 内線363							
発行年月日	平成14年1月31日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯山城下情報センター敷地内	長野県飯山市大字飯山1095番地	20213	—	36° 50' 55"	138° 22' 09"	20010801 ～ 20010830	58㎡	情報センター建設に伴う事前調査
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
飯山城下情報センター敷地内	屋敷跡	近世	建物縁石 5		肥前陶磁染付 2点		古絵図により安井氏宅地跡と判明	

飯山市埋蔵文化財調査報告 第65集

飯山城下情報センター敷地内遺跡

発行者 長野県飯山市大字飯山1110-1
飯山市教育委員会
TEL 0269-62-3111

発行日 平成14年1月30日

編集者 飯山市教育委員会

印刷所 (株)足立印刷所

